

分科会 3 概要報告書

分科会名	分科会 3 イクメンが仕事と生活の調和（ワークライフバランス）を実践するカギ		
実施日	平成 24 年 2 月 18 日（土）	実施時間	9：30－12：00
会場	淡海 1. 2	参加人数	157 人
登壇者	伊藤公雄（京都大学大学院教授） 岡島敦子（内閣府男女共同参画局長） 安藤哲也（ファザーリング・ジャパン代表理事）		

概要報告書

◆◆講演「男女共同参画社会と男性の生き方——ワーク・ライフ・バランス社会にむかって」

伊藤公雄教授

現代社会はワーク・ライフ・アンバランス社会だ。男性は長時間労働で帰宅時間もかなり遅く、また、実は女性の場合はワークの主要部分から外されている。男女平等度は世界で 98 位。賃金の格差は世界 93 位、管理職割合は 112 位。最近では非正規雇用の問題もある。しかし、70 年代以前は日本の女性はずば抜けて働く社会だった。農業や自営業が中心だったが、家族や地域で支え合っていた。これは国際比較をしても明らかだ。では育児はだれが担っていたか。おじいちゃんおばあちゃんだ。おとぎ話におばあちゃんやおじいちゃんがよく出てくる。おばあちゃんおじいちゃんたちが昔話を子どもに聞かせてきたからだ。つまり、もともと日本はイクメン社会だった。江戸時代には男性が子連れ出勤をしていた。

しかし、70 年代以降バランスの悪い社会になった。70 年代から 80 年代にかけて家族と労働をめぐる国際的関係が大きく変化した。日本は国際不況に対して男性の労働時間で対応した。1978 年には週 60 時間労働する人が 350 万人だったが 88 年には 777 万人に激増した。

70 年代以降の経済成長で、男性の長時間労働が急激に進み、男性の片稼ぎモデルが定着した。男女の所得格差が拡大し、女性は労働を抑制され主婦化が進行した——家事育児労働・非正規雇用へ、男女ともに人間としてバランスの悪い社会になっていった。

女性が働いている国ほど出生率が高い傾向がある。

面白いデータがある。男性の育児不参加が妻の夫離れを促進しているという調査だ。男性の子育て環境は夫婦関係にも悪影響を及ぼしている。子どもへの過保護、過干渉にもつながる。変容する家族と労働の仕組みに対応が遅れた国が日本だ。いくつかの国では変更し成功してきた。

社会のひずみが増している。男性の人間らしい生活の破壊・地域の絆と家族の絆の破壊が進行しているといえる。

男性問題の顕在化——仕事の顔だけで家庭での顔、地域の顔、趣味の顔を作れなかった。転換すべきだったのにできなかった。女性の参画が経済を活性化すると指摘はマッキンゼーの調査・モルガンスタンレー調査などでなされている。主に男性で支えてきた社会を男女で支える社会へ転換することが何よりも必要になっている。

なぜ男性の育児が進まないか？なぜ育児休業が広がらないか……有給休暇ではない。所得に影響、同僚に迷惑かけたくない、周囲の視線などが原因だ。

子どもの安定した成長のためにも、孤立した母親だけの子育てから家庭地域を貫く老若男女の共同の子育ての仕組みが必要だ。今の子どもは「人とのふれあい」が足りない中で育っている。企業が最近の新入社員について「コミュニケーション力」が足りないというが、父親が子育てに参加できないことが一つの原因になっている。——（おじいちゃんおばあちゃんの子育て支援も視野に入れつつ）子育ては男性

の人的成長にも重要で、三方一両実だ。

今後更なる高齢化の中で介護問題が大きな問題になるはず。現行でも介護による退職が激増しているが、今後はさらに問題化するだろう。この介護の問題からいってもワーク・ライフ・バランスの実現は喫緊の課題だ。企業にとっても様々なメリットがあることが指摘されており、男女共同参画とワーク・ライフ・バランスは21世紀の日本社会の安心安全のキーポイントといえよう。

◆◆鼎談

●岡島敦子内閣府男女共同参画局長

<第3次基本計画の概要>

男女共同参画社会とは、男性も女性もが喜びも責任も分かち合い、その能力も個性も充分発揮してのびのびとして生きていける社会。その社会の実現のために基本計画が策定された。2020年までに指導的地位に女性が占める割合を30%にする、M字カーブ問題の解消、ワークライフバランスの推進などのほか、今回男性にとっての男女共同参画が新たに加わった。なぜ、男性にとっての男女共同参画かという点、男性の長時間労働と、その長時間労働を支えるために女性にかかる育児家事の負担が大きいことが、女性が働き続けることを困難にしているためだ。だからこそ男性の働き方の見直し、意識を変えていくという男性の問題を掲げた。データでも、「男は外で働き、女は家庭を守るべき」など、性別で役割を固定的に分ける考え方は、徐々に減ってきているものの、まだ根強く残っている。

●安藤哲也氏

<なぜファザーリング・ジャパンか>

2006年に男性の育児のためのNPO、パパによるパパのためのNPOを結成した。なぜ結成することになったかといえば、自分も仕事第一人間だったが、これではいけないと思って転職などをして働き方を変え、子育てに目を向けていくようにした。やってみると子どもたちの成長や笑顔を実感し、妻との関係も良くなり仕事も効率よくうまくいくようになった。こんなことを発信し悩むパパたちを応援しようとしてNPOを立ち上げた。パパスクールを開催し、子どもとどう向き合うか、家事の仕方、夫婦の向き合い方など学んだことのないパパたちを応援している。意識変革と環境改善を事業戦略にして、様々な事業を社会活動に取り組んでいる。

●伊藤一東日本大震災でみられた諸問題を男女共同参画の観点からみるとどんな問題があるのか。

●岡島——震災で家や仕事を失った男性の悩み、仮設住宅の中での一人暮らしの男性の孤立化が問題となっている。地域とつながることの大事さが明らかになった。また、今回の震災で女性のニーズに対応できていないことが浮き彫りになった。女性に必要な衛生商品の備蓄がない、男性が配ったりする、等の問題もあきらかになった。防災計画の策定段階で女性が入っていないと、ニーズへの対応もできない。

●安藤——仕事を失ったパパたちの喪失感を被災地を見た。仕事を失って自殺した女性は少ないが男性は多い。男性のもろさも明らかになったのではないかと。仮設住宅内のDV問題もある。

男性中心の地域社会のかかわりの中で震災が起き、避難所や仮設住宅の生活面からの問題が発生している。震災時に日頃の家庭問題が露呈したケースも少なくない。

●伊藤——家事育児介護は人間が活着しているための必要不可欠な尊い労働なのにそれをなぜ女性のみなのかという指摘もある。この点、男性のこころや頭の構造をときほぐす必要がある。この辺りかがか。

●安藤——教育を受けてきたわけではないので男はわからない。ファザーリング・ジャパンに父子家庭のパパや専業主夫のメンバーがいるが、家事をやってみてその大変さや意義が分かったと言っている。やはりやらなきゃわからない。OSが古くて、想像力が働かない。家事をやる人への感謝やねぎらいを男性は知らない。

●岡島——避難所の食事作りを女性だけが担っている。瓦礫撤去には賃金が出ても、食事作りなどは無償であることがほとんど。ある地域ではそれを仕事として雇用を創出した例がある。食事作りは女性がやって当然という認識があるのも問題だ。また、配偶者控除等働くことに中立ではない制度も課題だ。

●安藤—子どもの命を守るためにもという視点も大事だ。ワーク・ライフ・バランスのライフは命という意味もある。遺族年金の男性除外の問題もある。今私の保育園のお迎えは7割はパパだ。時代は変わっている。

●伊藤—顔に傷を受けた時の補償は女性より男性が低い。子どもを死なせたときの遺失補償額は女性が低い。まだ問題は多い。男性がいつも優遇されているわけでもない

●安藤—産後うつの問題と男性の対応も課題にしてきた。また日本人は休むことに罪悪感がある。キャリアへの影響も気にする。育児休業というとネガティブにとられるので「育児修行」に変えるのもいいかもしれない。

●岡島—女性が働くとき経済効果があがるというデータも明らかにしている、女性が働き収入が増えると消費が増え税収も増える。働くママ支援の産業が増えマーケットも広がる。世帯収入が増えることで、男性も楽になると思う。

●伊藤—家計の責任は女性が7割を握る。男性が小遣いをもらう文化となっているので、男性は買い物の楽しさを知らないという面がある。

●安藤—パパは、お金がでるだけのATMじゃないかという声もある(笑)

●安藤—地域とつながる仕組みをどう作るか。多くの男性は電話帳に仕事関係の番号しかない、地域とのつながりがない。

●岡島—地域につながるイクジイの意義は大きいのでは

●安藤—昔、子育てしなかったパパが老後子育てのスイッチがはいて貢献する。高齢者は貴重な財産だ。これをどう支援していくか行政もやってほしい。

●伊藤—政府への要望などは。

●安藤—いろいろやってるが、もう少し突っ込んでいく施策、特にポジティブ・アクションについては企業のインセンティブ・ペナルティなどをやっていただきたい、また日本はトップダウンの面もあるので経営者への働きかけを強化してほしい。また育児休業というネガティブな名称も変更していただきたい。

●岡島—今日はいいアイデアをもらった。身近なところで変えていくことを学んだ。小さなことから改善できることはしっかりとやっていきたい。

●伊藤—今、本当は日本の社会はすごく動いている。大きな変化が見え始めている。しかし、可視化されていないという問題がある。

人間と人間の絆、地域の絆、家族の絆が大切になってきている。絆をつくることを戦後の日本はサボって来たのではないか、絆の再生が求められている。これを行政も支援してくことが求められる。父親のイメージ、母親のイメージ、家族のイメージも変えていくことが必要で、変えるのは我々しかいない。今日はいろんな話ができてよかった。